

平凡社 刊

寂庵の特仏堂の前庭に立つと

はるか彼方の空に、比叡山四明ヶ嶽の

頂きが聳えているのが見える。

嵯峨野をとりまく山々の背の上に、ちやうど

烏帽子をふせたようにぬきんぎょでいるその山頂を

見ると、私は二種のなつかしさと

安心感を抱かずにはいられない。

古都

毎年十月或二月十日には、祇園の妓たちが

福笹をにかけて、お客と

帰ってくるのに逢う。時代は移り、妓たちの

気質は変わつても、恋をする時の悩みや苦しみは

変わらないらしく、神詣でも、寺詣でも

祈ることの筋合は

母や祖母の頃と同じなのがいじらしい。



旅情

瀬戸内寂聴

平凡社 刊

室蘭の神仏堂の周囲に立つと

はるか彼方の空に、比叡山四明ヶ嶽の
頂が聳え出ているが見える。

雄勝野をとりまき、山々の背の間に、ちやうど

鳥籠子をかたようにめりこんでいるの山頂を

見ると、私は一顧のなつかしさと

安心感を抱かずにはいられない。

古都

舊年十月廿二日一日には、嵐の夜だから
指環をかきつけて、お茶と

焼つくるのに添う、時代は夢り、彼たなの

言葉は定つても、夢をする時の雫をききしめは

実わらないらしく、神隠しでも、尋問でも

きここの旅食は

は、旅の頃と同じながいらしい。

瀬戸内寂聴



旅情



古都旅情

著者〓瀬戸内寂聴 装画〓風間完 造本〓杉浦康平
定価〓一三〇〇円 昭和五十四年五月十五月初版第一刷

発行者〓下中邦彦

発行所〓株式会社平凡社 東京都千代田区四番町四 郵便番号〓二

電話東京〓〇三二六五—〇四五(代表) 振替東京八—二九六三九

印刷所〓東洋印刷株式会社 製本所〓和田製本工業株式会社

乱丁・全落丁本はお取り替えます。直接本社サービス課までお送り下さい。(送料本社負担)

©瀬戸内寂聴 昭和五十四年 Printed in Japan



瀬戸内寂聴 古都旅情

装画Ⅱ風間完 造本・構成Ⅱ杉浦康平



目次

美女の墓

9

嵐山

25

上賀茂の社

41

六波羅界隈

57

西山夕月

73

鳥戸野陵

89

比叡山

105

さざなみの志賀の都

121

冬の湖

137



鬼のいる寺

153

北野天満宮

169

二月堂お水取り

185

炎の舞

続・二月堂お水取り

201

吉野山新緑

217

中辺路万緑

233

丹波亀岡

249

修学院周辺

265

祇園・建仁寺

281





古都旅情



美女の墓



人

の運命の不思議さ。思えばいずこから来ていずこへ去るとも不明のまま、人はこの世にあるかぎり、何者かの手に握られた運命の糸にあやつられて、ささやかな喜愛に心を躍らせたり沈ませたりしながら、生涯の旅路をたどっていく。

賑やかに家族に囲まれ、あるいは相愛のふたりと肌あたたためあって暮していても、所詮、いつかはあの世への旅を、この世に訪れた旅のように、ひとり孤独にたどらねばならない。

もっと思いをひそめて見れば、手を携えあっている肉親や、友人や、同志という人々との連帯さえ夢^{ゆめ}幻^{まぼろし}かもしれないのであって、来しかた行く末、人はいつでもひとりであるのかもしれない。

人の世を旅にたとえた昔の詩人は、とうにこのすがすがしいことわりを納得していたのではないか。

四国の辺土と呼ばれる阿波の徳島に生れた私は、物心ついた時から巡礼の旅姿を見て育った。清らかな白衣に、真新しいすげ笠を、水色や赤い紐で白い頬から顎にかけて結んだ、見るから

に裕福そうな内儀や娘たちの巡礼もあれば、鼠色に汚れた白衣を葵えしぼませ、目もあてられないほど崩れた業病に冒された顔を、風雨で柿渋色に染まっただけの笠の中に深くかくし、手首の落ちた手に柄杓ひきやくをくくりつけ、門口に立って、おずおずと喜捨を請う惨めな巡礼もあった。

美しい巡礼も、あわれな巡礼も、町の人はともに「おへんどさん」ということばで呼んでいた。遍路へんろがなまって遍土へんどとなっていたが、遍土は辺土にも通じる。長じてからの私は、「へんろ」というひびきの中には、結婚前に四国巡礼をすれば幸せになれると信じて、母や姉たちと鈴をふりながら、菜の花畠の中から、れんげやたんぽぽの咲き乱れる野や畠の径をたどるすげ笠の人たちの群れを思い浮べた。「へんど」というひびきの中には、業病に腐りゆくわが身をひきずり、親兄弟にも、妻にも子にも見捨てられた人のよろめくような足どりを思い出すのであった。

幸福な巡礼も、不幸な巡礼も、その笠には「同行二人」の墨の字が書かれていた。孤独な旅だからこそ、目には見えない仏が、道づれとも先達ともなってくれることに縋りたく、心が慰められたのだろう。

生来放浪の星に生まれついているらしく、私は、家に在る時よりも、旅に出ている時の方が自分を取りもどし、いきいきとよみがえってくる。人に気をつかいサービス精神が強いため、客を迎えることが好きな癖に、客に疲れるのである。なぜか、私のところには客の絶え間がないのだ。一間きりの貧しい間借の時にも、家を構えても、アパートの仕事場に入っても、それは同じことであった。

私は人に疲れ、自分に飽きると、性こりもなく引越しをした。居を移して心を新鮮に保ちたためであったが、引越しと引越しの間には、小まめに旅に出た。

旅はつれない方がよかった。私は思いたった時、その場で立ち上り、旅に出る。

たったひとり、列車の片隅に身を置いている時や、飛行機で雲海を渡っている時、私はよく、杳い日、故里の菜の花畠の中から蝶のようにわき上ってきた白い巡礼の群れを幻に見た。それは、まばゆい青空の涯まで輝きながら拡がっている白い雲海の中に遠ざかっていく姿であったり、霧雨に煙る枯野の細い道に、とぼとぼと杖をひくすげ笠であったりした。

幼い私が、何とはない憧れをこめて、町角までついていき、鈴の音の遠ざかるのを見送った、幸福な巡礼たちのなつかしさも、怖さと嫌悪におびえながら、それだからこそ心にかかり、どうしてもそつと後をつけてみなければならなかったみじめな遍土の蹠跟そろうとした足どりに覚えた切なさも、私の旅愁の底には深くたたみこまれているようであった。

二十六歳の厳寒のある夜、私は鈍行の東海道線の下り列車の三等車の片隅で軀を固くしていた。夫と娘を捨てて私は遂に無謀なひとりの旅へふみきったのだ。

私の隣りは復員服の男が思いきり両膝をひろげて頭をのけぞらせ眠りこけている。頬にも顎にも硬そうな無精髭がのびて、顔は陽やけたとも汚れたともとれる青黒さが滲んでいる。油気のないせいか、その顔色はひどく不健康に見える。上前歯がかけた口をだらしなくあけて、破れた笛のような声がまじる太いいびきをかいている。時々、まるで意志が目覚めているように私の方に肩を重く寄せてくる。私は目立たないように、しかし、次第に力をこめて邪怪に、肩を押し返していた。男はその度、頼りないほど素直にぐらついて、肩を引く癖に、また五分もすれば、ずっしりとした重さを私の方へ押しつけてくるのだ。男のつきだした足の向うの座席では、老婆がモンペの膝をきちんと曲げて、せまい座席の上に坐りこんで眠りこけている。私たちの方には横向に、通路に向かって坐り、手すりに腕をのせて、その上に顔を押しつけているのだ。猫が出来るだけ小さくなって眠っている姿に似ている。

私の真前の席には中年の女が、男物のズボンに、男物のオーバーを着こんで、衿元にはえび

茶色の毛糸のマフラーをまきつけ、パーマのちりちりにかかった頭髮に、しょっちゅう両手の指をつつこんではばり掻いている。目はつむっているのだが眠っているのではないらしく、時々、気がつくとはれぼったい黄色い瞼の下から、薄目をあけて、私の方をうかがっている。老婆も、男も、私もほとんど荷物らしい荷物もないが、その女は、ふくれあがつたりユックと、信玄袋とトランクを持っていて、網棚を占領していた。思い出したようにするめの足をかじっては、ペッと唾をはくのが、私の進駐軍の毛布を縫い直したズボンにかかるので、気持が悪くて仕方がない。

夜行列車の中はすえたような匂いがこもり、煙草の煙と人いきれで空気はどんより曇っていた。いびきと歯ぎしりと、赤ん坊の泣き声がまざりあって車輪の音に陰気にからみついていく。じっと目をつぶっていると軀の下で廻りつづけている車輪は後ろへ後ろへと走っているような気がしてくる。後ろへもどられては困るのだ。もう帰れないのだ。誰が何といっても、私は出発してしまったのだ。母親が家出しようというのに、わけもわからず、父親の胸に抱かれて、機嫌よく手を振りつづけていた三歳の娘の顔。

私は奥歯を噛みしめ泣き声をもらすまいとして胸を押しあげるようにする。前の席の女の黄色い瞼の下細い目が、そういう自分のすべてを執拗に見つづけているように思い、私は思いきり、またしてももたれかかっている隣りの男の肩を強く突きかえしておいて、老婆の真似をして、ぐっと身をねじり、窓わくに腕をのせ、顔を押しつけていった。

京都に着いたのは午前四時だった。まだ夜は明けず二月の未明のプラットホームの寒気は、氷のように一挙に私を包みこんできた。人気がないプラットホームの向うから靴音がひびいて女友だちが二人駆けよってきてくれた。

「どうしたの、それ」

私は右目に夜目にも白い眼帯をかけていたのだ。私はげんこをつくって、アップパーカットの真似をしてみせた。女子大時代の友だちは声をあげて笑った。私も笑った。森閑とした暗いブラットホームに、私たちの笑い声がひびきかえった。何しろ、私たちは若かった。京都はなんて寒いといいながら、オーバーも着ず、着のみのままで出てきた私は、それでも両腕を四、五回ぶんまわしのようによし、足ぶみをする、たちまち全身があたたまってくるのだ。

私が自分の家出の落着先を、京都と選んだのは、全くの偶然からであった。着のみのまま無一文で出た私は、電車に乗る金もなく線路づたいに二時間歩いて、東京の友人の家にたどりつき、借りた金が、たまたま、鈍行で京都行きの旅費分しかなかったということであったのだ。東京駅で運賃表を見上げながら、どこまでなら行けるだろうと首が痛くなるほど仰向いていた私の姿を思い出す。

無鉄砲で無計画で行き当りばったりの、それからの私の放浪の旅の癖は、この時に始まったといつてよい。

京都だと決めた時、京都にいる女友だちの顔が浮んできた。私はその場で彼女に電報を打った。電報を打ってしまいキップを買うと、私はもう、うで卵も買えないほど無一文になっていた。

その日から足かけ四年、私は京都に住みついてしまった。

北白川に下宿して、進駐軍に勤めていた友人の部屋にころがりこんだのだった。

職は、友人の弟さんの京大生の世話で、その先輩が勤めている出版社に入ることが出来た。

あの時、私が東京の友人に借りた金が、もし、名古屋までしかなかったら、私は名古屋に下り、木賃宿にでも泊って職を探したかもしれない。

京都は戦災にあつていず、信じられないほどの美しさを残していた。